

生類憐みの令と弘前藩

篠村 正雄

はじめに

生類憐みの令について、塚本学氏は、それまでの研究を集大成して、五代將軍綱吉の鉄砲改め・鷹制度の縮減、犬愛護令、捨馬禁令、捨子禁令が包括され、江戸の町から諸藩へ拡大し、生類が権力により保護される面と、生類の保護を命ずるという二面を持っていたとする^①。山室恭子氏は、貞享二年（一六八五）から宝永六年（一七〇九）までの二四年間に一三五回発令したものの総称であるとし、なかでも貞享四年に一八回、元禄七年（一六九四）に一回あったことを指摘している^②。根崎光男氏は、人と動物の関係を綱吉の犬・吉宗の鷹政策が政治権力によって大きく動かしたことに言及している^③。

捨子について、徳田彦安氏は、捨子の理由を六分野に分け、幕府は捨子養育を町方・村方に負担させたことと、大坂で非人が子を非人身分から脱出させるための捨子が多かったことを指摘している^④。井伊玄太郎氏は、近世の捨子に対する処罰例を挙げ、一九世紀、役人は先例を参考にしながらも軽罪化の方向を採ったとする^⑤。有賀喜左衛門氏は、民俗学の立場から捨子を扱っている^⑥。

江戸の捨子について、中野達哉氏は、萩藩江戸屋敷において出入りの町人が関わり、養子に添金・門札を付けて対処していることを明らかにしている^⑦。

岡山藩の捨子について、守屋茂氏は、岡山県の慈善救済史の中で、岡山藩・勝山藩・津山藩・天領倉敷における捨子養育を取り上げている^⑧。妻鹿淳子氏は、岡山藩では養育米を支給したが一貫性が無く、幕末の岡山城下では捨子三三例の内二四例、七二・七が女子であり、村方で養育の場合は村人の家を一日毎に回されることを明らかにしている^⑨。沢山美果子氏は、岡山藩・津山藩の捨子、仙台藩・一関藩の育児仕法、明治政府の捨子救済から捨子と子育ての実態を調べ、子育てに欠くことのできない乳の確保について考察を進めている^⑩。

福岡藩の捨子について、安川巖氏は、博多で多くの町家が捨子の養育にあたり、特に加瀬屋が門口に捨てられた捨子三二人の内、一六人を拾い上げたことを明らかにしている^⑪。田中道雄氏は、博多の格式町人で俳人の平山蝶醉が兄重堅と捨子養育事業に関わったのは、蕉門俳諧の人情という精神的価値が共通することによるという^⑫。横田武子氏は、福岡藩は村方での相互扶助による養育困難から、寛政・文化期に養育仕組米を

渡して運用させたことを指摘している。¹³ 井上隆明氏は、元文五年（一七四〇）から明治元年（一八六八）までの町方の捨子一二二例を調べ、捨子を拾い上げると乳持ちを雇い、世話人により養育先に養育料・養育米を添えている事例を紹介している。¹⁴

小野藩の捨子について、三木えり子氏は、捨てる側を処罰より養育させる方法を探り、子がない家に捨てて養育してもらう目当捨てが行われたとする。¹⁵

小倉藩の捨子について、川本英紀氏は、捨子四八〇人の内、二五二人に添えられた置手紙を分類して、産土社の氏子であることを示し、非人に属していないことを証明して子の幸せを願ったものとみている。¹⁶

加賀藩の捨子について、立浪澄子氏は、捨てる側への刑罰は、江戸では重いものが獄門で、多くは追放されたが、加賀藩では磔から斬罪まで幅があり、時代によって揺れのあることに触れている。¹⁷

京都の捨子について、菅原憲二氏は、江戸から生類憐みの令が届く前から、町が世話人を通して持参銀・産着料を持たせて他町へ養子に出して捨子を排除し、この負担が町内寄合経費の半分以上であったことを指摘している。¹⁸

大坂の捨子について、小堀一正氏は大坂の経済発展と人口膨張から、捨子養育を町人の自治的機能に任せたことに触れ、¹⁹ 海原亮氏は住友が都市の社会構造の中で、捨子養育に果たした役割について明らかにしている。²⁰

東北諸藩の飢饉資料から菊池勇夫氏は、子殺し・捨子は東北地方全体に広がり習俗化した方法とみている。²¹

江戸の辻番について、伊藤好一氏は、木戸と共に江戸の治安維持にあたり、生類憐みの令下で任務が拡大し、²² 岩淵令治氏は、幕府目付の支配下で捨子・迷子の介抱、養育・貰人の世話が義務付けられていたとする。²³

生類憐みの令は貞享二年の動物愛護令から始まり、本格的には同四年一月、捨病人・捨牛馬の禁止、二月、江戸での犬保護令、四月に捨子養育が加わったとするのが定説になっている。²⁴

これまでに弘前藩領内・外の旅人が、病氣・行倒れした際の取り扱いが生類憐みの令の一部であることを明らかにした。²⁵ そこから、弘前藩が旅人の保護以外で生類憐みの令をどのように政策に反映させたかと、数多い捨子の先行研究を参考に弘前藩における捨子の取り扱いを考察する。

また、生類憐みの令廃止前後の政策に言及する。

使用する「弘前藩庁日記」は、国元と江戸の記録があるので、以下、「国日記」、「江戸日記」と略記する。²⁶

一 江戸

貞享四年（一六八七）四月一日付の江戸町触二通は、「国日記」に同文があるところから、捨子、鳥・畜類、犬の扱いと武蔵国寺尾・代場村の病馬捨ては死罪・流罪に相当するという幕令を、江戸・国元で認識し、領内に周知させていることが解る。²⁷ 同月、幕府目付が辻番所へ直接来て、生類を疵付けた者の取り扱いを伝えた際、弘前藩は御聞役代理を立ち合せている。²⁸ 藩庁は足輕・長柄之者で編成している辻番にまで幕令を知らせることになる。元禄七年（一六九四）、幕府目付が弘前藩

邸で、辻番所付近の疵付いた生類の取り扱いを伝え、藩庁は辻番四か所へ知らせた。⁽²⁹⁾同八年、上屋敷裏門で門番が、犬喧嘩で傷ついた無主の子犬を屋敷内に入れて養育し、犬医者白笠屋伝助に手当てをさせ、幕府目付牧野半三郎へ届けたところ、半三郎は直接、犬の様子について尋ねている。⁽³⁰⁾同十三年、森和泉守屋敷・割下水で鳥もちの付いた竹を背負った白鴈が発見され、弘前藩下屋敷辻番に留置いたが、辻番四人が幕府評定所へ呼び出された。口書と口述との違いから二人は揚屋入りとなったが、詮議の結果、疑い無しで放免されている。この時、藩庁は下屋敷の八三人を調べ、世話になった幕府目付・小人目付へ合わせて金二両を付け届けている。⁽³¹⁾同十五年、弘前藩辻番が、廻り場の内、大久保吉之丞屋敷門の近くで生後間もない捨子を発見し、南隣・向角屋敷に断ったうえで吉之丞方へ引き取らせている。⁽³²⁾この年、麴町の組合辻番で犬の取り扱いに不届きあったとして、幕府目付は辻番四人に手錠をかけ、町奉行の再吟味に任せているところから、辻番が生類憐みの令施行の接点になっていた、緊張した弘前藩の対応が見えてくる。⁽³³⁾

屋敷内では、同一〇年、小石川屋敷内に出生の子犬二匹（牡一・牝一）が捨て置かれていたので、犬医者白笠屋伝助弟子伝五郎の派遣を頼み、養育方法を聞いている。古布団の綿で暖め、乳持ち犬を探すのは難しいことから寒晒粉に砂糖・薬を入れて与えた。牝犬の方が死んだので桶に入れて屋敷内に埋め印の杭を立て、藩主に報告の上、幕府目付へ届けている。犬医者には礼として金二百正を付け届けている。⁽³⁴⁾

この他では、貞享四年六月九日、藩主信政が那須遠江守・戸沢能登守を訪問後、日本橋肴店を通過の折、吠える犬が飛び出し、駕籠脇右方に

いた小山寛弥が触った疑いが生じた。藩主へ報告し、心ならざる行為として遠慮処分となった。長屋が同じ久保田源助にも人の出入りを禁じている。六月二一日に遠慮が解かれているところから、幕府側からの呼び出しがなかったようである。⁽³⁵⁾信政の三男資徳は那須家の養子に入ったが、烏山騒動後に改易され弘前藩邸で生活していた。元禄一二年、小日向への途中、乗馬の藤戸が斃れた。弘前藩目付・足軽が現地へ出かけ、斃馬は菰包にして車で小塚原まで運び、道心に五〇〇文を渡して片付けさせ、藩主へ報告している。⁽³⁶⁾

国元では元禄四年六月、石田坂村百姓次兵衛が熊を殺し食した事件が発生した。人に危害を及ぼす熊を殺すのは認められるが、獵師でない者が食したことが生類憐みの令に触れることになり、藩庁で連日詮議したが処罰が決まらないまま大目付より在府の藩主へ報告した。江戸藩邸は老中戸田忠政に伺い、江戸町奉行扱いとなった。⁽³⁷⁾次に処分の史料を挙げる。

〔史料1〕『御仕置裁許帳』⁽³⁸⁾資料番号六九二

元禄四年未九月五日

忤人次兵衛 是ハ津輕越中守領分奥州石田坂村之百姓、此者熊を殺

候由ニテ、越中守方より戸田山城守え相達し、山城守

より御断ニテ、越中守家来相州竹右衛門、中畑清助、

今助九郎召連来ル付、牢舎、

右之者、申八月新嶋え流罪、

次兵衛は国元から護送されて本所浜屋敷へ入り、江戸町奉行の手で新嶋へ遠島の処分となったが、生類憐みの令廃止後の宝永七年（一七一〇）

一月一日に赦免されて国元へ戻った。⁽³⁹⁾

江戸町奉行の判決集『御仕置裁許帳』にみえる生類憐みの令で大名・幕臣に関連する判決が四二例あり、その中で一七例が知行所に関するものである。弘前藩だけでなく、国元で扱いかねる事件を江戸町奉行の判断に委ねていることが解る。

犬改めは、元禄八年、幕府目付神尾備前守が来邸して申し渡しがあった。弘前藩の調査で上屋敷・大川端・下谷屋敷の犬は零、小石川屋敷の牡犬二、家臣の犬一三匹（牡一一・牝二）が確認され、幕府目付へ報告している。⁽⁴⁰⁾同九年、屋敷内の犬を知行所へ移動して良いとの幕令が出る⁽⁴¹⁾と、唐犬八（母犬一・子犬七）、地犬五（母犬二・子犬三）の計一四匹を籠に入れて国元へ送ったが、仙台領関村で子犬一匹が病死し、同所関泉寺に錢二〇〇文で頼み埋葬している。この犬が弘前に届くと町方・在方に引取らせている。⁽⁴¹⁾これは、江戸での繁殖を防ぐ為の施策であろう。

御犬出金は御犬上ヶ金とも言い、幕府が元禄八年から四谷・中野に犬小屋を建て、運営資金を江戸の町に割付け、小間一間に金三分を年二回に分割して納めるものであった。⁽⁴²⁾同九年、江戸の町々は勘定奉行稻生正照立ち合いの下で町奉行能勢頼寛の番所に納入している。⁽⁴³⁾同一〇年には年二回、名主・月行事が本両替町大坂屋六右衛門方に持参し、江戸町年寄檜屋へ納めている。⁽⁴⁴⁾同年、三分の二を減じ、同一六年、地震・火災により廃止となった。⁽⁴⁵⁾

江戸近在の村からは犬小屋造営資材の徴発を行った。⁽⁴⁶⁾弘前藩は同一六年、柳島・亀戸両村に一万六千余坪の抱屋敷を持っていた。この年、亀戸村名主勝田六郎右衛門へ納めた百姓役一二両の中に、町年寄へ上納す

る御犬出金も含まれているが、その基準や負担額は不明である。⁽⁴⁷⁾御犬出金は町方・在方より江戸町年寄が集め、江戸町奉行・勘定奉行へ納入したとみられる。

弘前藩邸では生類憐みの令に関しては、幕府の方針に沿った対応をしていて、逐一藩主へ報告し、時にはその指示によった取り扱いをしていることが解った。

同時代の歌学者戸田茂睡がこの幕令で江戸の諸人が迷惑・困窮し、悪政になっていると酷評しているのは、まさに正鵠を得たものといえよう。⁽⁴⁸⁾

生類憐みの令廃止後の文化一四年（二八一七）、金木村宇三郎の母みよが、大伝馬町辺で狂犬に噛まれて歩行困難になった。伊勢参りの旅であったとみられる。弘前藩邸は藩医を派遣し、雇頭宗七に預けて療養させた。一両三步を貸し、国元で代官を通して上納させることにした。⁽⁴⁹⁾この処置は生類憐みの令の旅人保護の政策が継続していることになる。

二 国元

東北芸術工科大学東北文化研究センター編『弘前藩庁御国日記狩猟関係史料集』（全三巻）⁽⁵⁰⁾は、「国日記」から生類憐みの令に関する猟師とアイヌ、山の神、熊・狼・狐・猪・鹿等の三〇六七項目を取り上げ、解説を加えているので調査・研究の参考になる。また、門脇朋裕氏は、弘前藩による生類憐みの令の領内への伝達の仕方と、元禄一〇年（二六九七）六月の幕令「自分仕置令」前後で処罰に違いのあることを明らかにしている。⁽⁵¹⁾この先行研究を参考に、次の項目を考察する。

(1) 鉄砲改め

幕府は生類憐みの一環として、貞享四年（一六八七）から諸国鉄砲改めを本格化した。⁽⁵²⁾ 弘前藩はこれ以前の寛文四年（一六六四）、青森范で野犬が馬の子を喰ったことから、藩の鉄砲打を派遣して八匹を打ち殺させている。⁽⁵³⁾ この後も目屋野沢の狼荒れ、馬場尻村の植田を荒らす鴉に鉄砲打を派遣している。⁽⁵⁴⁾ 貞享二年、諸組に鉄砲改めを命じ、青森在番足輕が稽古で犬・鳥を撃つことを禁止し、鉄砲の管理を行っている。⁽⁵⁵⁾

元禄元年、浪人所持の鉄砲改めを領内尾太鉾山まで実施し、鉄砲指南の牢人朝比奈八左衛門の六挺を取り上げている。⁽⁵⁶⁾ 同二年、家臣の鉄砲改めを行い、足輕以下の所持する鉄砲、郡奉行支配下の鉄砲は支配頭預けとさせた。黒石津輕家に分知した一部が天領となった所の百姓には鉄砲所持の証文を提出させている。⁽⁵⁷⁾ ここに、鉄砲改帳を作成して幕府へ提出することで、領内の鉄砲管理が成立したことになる。また、同一四年、再度、藩士の鉄砲改めを実施し、御目見以下と召放しの者の鉄砲は蔵入りとした。⁽⁵⁸⁾ 鉄砲改めは大目付の取り扱いで、同一三年には一九四挺を数え、正徳二年には武具奉行は長持に入れた牢人の鉄砲が増え、新規に長持を用意している。⁽⁵⁹⁾

鉄砲打ちは、幕府の精進日は禁止であった。⁽⁶⁰⁾

獵師は百姓身分であるが、藩庁発行の「獵師御印札」を所持し、高懸銀を免除されていて、熊胆・皮を藩庁へ納入する義務を負っていた。⁽⁶¹⁾ 元禄一五年、獵師一一六人が確認でき、鉄砲は庄屋が預かって管理し、藩から弾薬の貸与を受けると熊胆・皮の代錢で決裁した。⁽⁶²⁾

異国船の渡来により、嘉永五年（一八五二）、藩庁は鉄砲改めを実施

し、甲冑・鉄砲については双方の話合いで譲渡し、他国・町方への売買は禁止した。⁽⁶³⁾

生類憐みの令が廃止後も、弘前藩は鉄砲掌握を幕末まで継続してきたことが明らかになった。

(2) 熊荒れ

元禄八年から享保五年（一七二〇）までに熊による人身被害が頻発していて、死亡二二・負傷四八人を数える。⁽⁶⁴⁾

元禄二年六月の幕令二通が七月に国元に届き、藩士は組頭より、町方は町奉行を通して周知させている。⁽⁶⁵⁾ これによると、猪・鹿・狼荒れは次の三項目が示されてあった。①猪・鹿・狼は追い払う。②鉄砲打ちは日切を定め、帳付けして届ける。③打ち殺した時はその場に埋置き、獵師以外は商売と食することを禁止する。前章で触れた同四年の石田坂村次兵衛は、熊を殺した時に埋置かずに食した行為が問題になったが、弘前藩には前例がなく江戸町奉行に処罰を任せたことになる。同八年、弘前藩は幕府大目付の鉄砲役人に、遠国の取り扱いを確認している。それは、遠国での熊・狼荒れについての次の二項目であった。①鉄砲で打ち留めた時は、目付が立ち合って埋め、印の杭を立てて届け出る。②荒れが止まれば、藩主が花押を据えた証文を幕府へ届け出る。⁽⁶⁶⁾ 弘前藩から幕府へ熊・狼荒れによる鉄砲打ちの許可を得る日数がかかることから、このような簡易な手続に変わったようである。

元禄九年四月、浦町組高無百姓の子が駒籠山に薊採りに入り、熊に殺され、宮崎村の子は負傷して逃げ帰った。その後、古館村の百姓が熊に

殺されている。この被害が庄屋・五人組から代官・郡奉行・家老まで届き、足軽目付が見分後に鉄砲打が派遣されたが、五月に入っても熊を仕留めることができなかった。⁽⁶⁷⁾ 同一年、駒籠山の熊荒れに、弘前藩は伏^{えぞ}(アイヌ)が引き連れたまたぎ大二匹に、一匹に付き一日五合の扶持を与えている。また、伏二人が駒籠山で仕留めた熊の手・足・胆を弘前藩庁へ届けたので、褒美として一人に米二俵を与え、同道した伏四人と妻子に飯米を支給している。⁽⁶⁸⁾ 正徳三年(一七一三)、後潟組の熊荒れには、鉄砲所持の獵師に玉・薬を与え、狼荒れには、上磯の伏四人に命じ、一日三度の賄を支給している。⁽⁶⁹⁾

このように、熊荒れには鉄砲打・獵師の他に、毒矢を用いる伏をも動員し、生類憐みの令廃止後も続けられた。獵師には熊・皮の上納が義務付けられたが伏にはなかった。

(3) 狼荒れ

元禄二年から享保一四年までの狼による人身被害は八二人あり、捕獲は五二匹を数える。⁽⁷⁰⁾ 元禄五年、人が狼六匹に襲われているのを東光寺村の百姓六人が追い払った。庄屋・五人組頭、代官手代が死骸を確認して片付け、印の杭を立て、郡奉行に報告している。⁽⁷¹⁾ 同一〇年、高杉組・赤田組・桑野木田組の村で馬四七・犬四匹が狼に喰われ、九か村の庄屋からの依頼で、藩庁は鉄砲打を派遣している。⁽⁷²⁾ 宝永元年(二七〇四)、芦野村では四歳の娘、豊田村では五歳の男の子、七歳の娘、福浦村では七歳の娘、富野村では四歳の娘が、いずれも寝所で喰い殺されたり疵を負わされたりしていて、藩庁は伏二人に狼狩りを命じている。⁽⁷³⁾ 薄市村高無

善右衛門では、夜中に寝所に入った狼が母の懷から子を咥えて逃げ、村人が搜索したが喰い殺された後であった。代官から郡奉行を通して家老へ報告している。⁽⁷⁴⁾ 新田村百姓弥三郎の孫まつ(男・一九歳)が、田の水引きの際に牡狼に襲われ、熊手で打ち殺したため、詮議が村中の百姓・高無百姓・借家人までに及んだ。この後、まつは村預けになっている。⁽⁷⁵⁾

このように、家の寝所まで入り込む狼の被害に対し、藩庁がとった政策をみていく。元禄二年の幕令は猪・鹿・狼は追い払うこと、期限付の鉄砲打ち、獵師以外の生類打ちの禁止であり、藩庁はこれを領民へ周知させた。⁽⁷⁶⁾ 同四年、狼は見つけにくく、一匹も殺すことができなかった。そのため、江戸藩邸を通して狼打ちの巧者に尋ねたところ、朝夕に巢穴を出入りする道は定まっておらず、風下から打ち取るよう伝授があった。⁽⁷⁷⁾ これにより、足軽による狼打ちを領内四三か村へ派遣し、成果が報告されている。⁽⁷⁸⁾

撃ち留めた狼の扱いを次の史料からみていく。

〔史料2〕「国日記」元禄五年七月二日条

一、昨朔日之晩七過頃、増館組於吉野田村牡狼壹疋打留申候由、鉄砲打野沢十右衛門より佐山権内方^江注進之旨、権内申出之狼寸尺左記之、

一、惣尺耳之間より尾之附際迄式尺九寸、(中略)

一、右狼例之通入念埋置、記之杭立置候様^ニ申付之、則杭之寸尺書付左^ニ記之、

元禄五^{壬申}七月朔日於此所討留候狼壹疋埋置之、

裏^ニ増館組之内吉野田村と書之、

右杭木長四尺幅三寸⁸⁷申付、則杭木之義郡奉行^江遣之、

足輕目付・郡奉行役人・代官は近郷の庄屋・五人組頭を立ち合せ、以前、埋め置いた場所がずれていたため、狼の死骸を樽沢村へ埋め直している。狼が少し腐っていたが、五尺程の穴に藁藪二枚に包んで埋め、印の札を立てて処理している。この死骸を埋めて印の杭を立てることは、旅人の死亡と同様の扱いであった。⁸⁹

正徳五年、広須新田で野放しにしておいた当歳と二歳の馬の子が狼に喰い殺され、藩庁は鉄砲打にこれまで通り、見つけ次第打ち殺すように指示している。⁹⁰享保八年、森山村・切明村の猟師からの願い出により、藩庁は飼い置く薩摩犬の牡牝一対を与えているが、これは、猟犬である。⁹¹同一四年、横内組の狼荒れで男女各一人が喰い殺され、鉄砲所持の猟師四人に派遣を命じている。⁹²

狼による被害について藩庁の取り扱いは詳細を極め、鉄砲打ちが効果的なため、生類憐みの令の廃止後も続けていたことになる。

(4) 捨馬

貞享四年、在方では牛・馬を野原に放って置き、飼い主の無い馬が存在したこと、藩庁は入札で馬二頭を一六匁と二匁一分、牛一頭を二匁で処分している。⁹³また、捨馬が流罪に当たることの幕令を藩士に周知させ、翌年五月、領民に斃れ馬は目付へ届け、指図に従うようにさせた。⁹⁴元禄四年、捨馬禁止の高札を藩主に示した上で領内に立てさせている。⁹⁵宝暦九年（一七五九）、大間越町の火事の際、捨馬の高札が割れているところから、生類憐みの令廃止後にもこの高札が掲げられていた。⁹⁶

捨馬禁止の高札は、諸国に掲示するものとされ、仙台藩・加賀藩に於いても公示された。⁹⁷八戸藩は寛文一一年から切支丹と並んで捨馬禁止の高札があり、正徳三年には高札の八項目中に捨馬禁止がみえる。⁹⁸

元禄九年、茂森町長勝寺門前の山道に捨馬があった。同町長助が塩分町の忠右衛門から二匁五分で買ったが、病馬であり空き地に留め置いたところ斃れた。町同心・茂森町名主が見分し、病馬であったので町奉行は長助を呵処分としている。⁹⁹同一六年、野内関所の脇道で、町同心が三歳駒を盗んだ馬喰を取り逃がした。藩庁は村中に繋いで置き、馬主が名乗り出れば渡し、無ければ入札で処理させることにした。¹⁰⁰

元禄一四年の尾上村の「馬数改書」では三七匹を数え、桜庭村の「切支丹改証文」には駒・駄馬の区別をした馬数も記入させている。¹⁰¹宝永元年、弘前藩は領内の牛・馬・鶏・犬を雌雄別に調査させ、算者に改め帳を作成させた。¹⁰²馬は伝馬・町馬に徴発するところから、馬数を掌握しておく必要があった。

(5) 捨犬

福田友之氏は、青森県の多くの縄文遺跡から犬骨が出土し、二ツ森貝塚（七戸町）からは幼犬、滝端遺跡（階上町）からは犬二頭の埋葬例があり、亀ヶ岡遺跡（つがる市）からも犬骨が発見されていて、猟犬として飼われていたとみている。¹⁰³狩猟民族は犬を猟犬として扱い、農耕民族は犬食の習慣を持っていたといわれ、弥生期には犬食が行われていたとするが、¹⁰⁴当地方の弥生期での犬骨出土の報告は未だない。

中世では十三湊遺跡（中泊町）・大光寺新城遺跡（平川市）で犬骨が

出土するところから、近世に入ってから小型の系譜を継ぐ地犬（町犬・村犬）が存在していたとみられる⁽⁹⁵⁾。明治二年（一八七八）、イザベラ・バードは、日本で見た犬を記述していて、黒石（黒石市）の黄色い犬、北海道・平取のアイヌ集落の犬を紹介している⁽⁹⁶⁾。

弘前藩は松前から將軍家への鷹献上の輸送を御役奉公として捉え、藩としても鷹献上、御三家・老中への鷹進上を行っていて、鷹献上道中には餌犬を引き連れていた⁽⁹⁸⁾。天和三年（一六八三）、弘前藩は鷹餌犬代として在方一軒より銀子二匁を徴収し、鑑札所持の餌差二一人が領内を巡回して、鷹餌に適した犬は一軒銀二匁で買い上げている⁽⁹⁹⁾。生類憐みの令以前に犬は雁・鳩・雲雀と共に鷹餌になっていた。

仙台藩・白川藩など諸藩でも鷹餌犬代を課していたことが解る⁽¹⁰⁰⁾。

弘前藩は、貞享四年の生類憐みの令で、犬に関しては飼い主のいない無主犬に食物を与え、飼い犬が死んでも異常が無ければ届けなくても良いことにしている⁽¹⁰¹⁾。宝永元年、領内の牛・馬・鶏・犬改めで算者に雌雄別に帳付させている⁽¹⁰²⁾。

弘前城本丸の台所で犬を飼っていたが、城内に棲む狐退治と郭内に狐の出入りを防ぐため、犬引に老犬になっても捨てずに飼い、犬扶持米を与えている⁽¹⁰³⁾。城内では坊主頭が狎・猿・雁を飼育しており、元文五年（一七四〇）、藩主の国入りの際、鶴・隼・大鷹と共に犬二匹が碇ヶ関まで出迎えに出ていて、これらは愛玩用とみられる⁽¹⁰⁴⁾。

獵犬については、享保期、將軍吉宗が獵に適した唐犬を輸入し、飼育が拡大した。江戸藩邸から唐犬・薩摩犬が国元へ送られて、生まれた薩摩犬には成長により一日米二合を与えた。獵師の願い出により薩摩犬の

牝・牡一對を下付して繁殖を図っている⁽¹⁰⁵⁾。

犬の扱いについて、次の史料をみる。

〔史料3〕「国日記」元禄二年六月一日条

一、犬の儀有来候をいたわり申儀者御書付之通候、面々慰犬を養候様ニ相聞候、其訳ニ而者無之候、尤喰犬者小屋ニ入つなき、人ニかか里不申候様ニ可申付、牝犬をは小屋ニ入置、牡犬与一所ニ差置申間敷候、御大法^{茂立}、犬多ク不成様ニ面々心得候様ニ可申付候、尤侍中飼置候犬町在々^{江茂}もらわれ候ハ、遣不申訳ニ而者無之候、手前ニ飼置度申事候ハ、相对次第ニ可遣候、

江戸より藩士への指示は、人に噛み付く犬は犬小屋に繋ぎ、牝犬は小屋に入れて牡犬と隔離し、町人に犬を譲るときは相対で行うというものであった。

元禄二年、青森・善知鳥宮境内で白犬が犬に喰われて死に、箱に入れて埋め、印の杭に年月日を書いて立てている⁽¹⁰⁶⁾。同六年、藩士の屋敷前で犬の友喰いがあり、喰い殺された藩士の犬の方は、徒目付が見分して屋敷内に埋めさせている⁽¹⁰⁷⁾。同八年の幕令は養育困難な捨子・捨犬は、支配頭に申し出て養育可能な者に預けるといふものであった⁽¹⁰⁸⁾。同九年、江戸から移送してきた犬の内、親方町十三郎に預けた犬一匹が病死し、足輕目付の見分後に新寺町西福寺に二尺の穴を掘り、菰包にして埋めている⁽¹⁰⁹⁾。同一三年、弘前町の無主犬を捕え、在方へ追放している⁽¹¹⁰⁾。

生類憐みの令廃止後の天明三年（一七八三）の飢饉では、青森町・木造村で犬の吸い物を売り、城下楮町の非人が犬を捕えて食したため、飼い主は犬の首に持主の名前を記した札を下げさせたという⁽¹¹¹⁾。また、天保

四年（一八三三）、在方の者が城下で犬を盗んで馬で運び、新田地帯では犬・馬を食し、青森町には犬殺しが現れたという⁽¹⁰⁾。

犬の病気については、城内台所の白犬の首腫を外科長内三益に療治させ、土手町長兵衛に預けた子犬が食さないので、犬宰領から薬を与えている⁽¹¹⁾。享保一二年、狩場で怪我した獵犬とみられる穴犬に治療用の有明行灯の油、馬医者からの請求で猪の油・鶏糞を用意している⁽¹²⁾。

狂犬病は享保期に長崎から全国に拡大し、寛保元年（一七四一）、領内で狂犬病の犬の大半と噛まれた人・馬・狐・狼が多く死んだという⁽¹³⁾。安政二年（一八五五）、藩医北岡太淳に狂犬病を研究して治療に当たらせている⁽¹⁴⁾。文久二年（一八六二）、異国より伝わった「はしか」に初め町方の犬が罹って大半が死に、それから人に移ったというが、狂犬病であろう⁽¹⁵⁾。明治一八年、パスツールが狂犬病ワクチンを開発、昭和三二年（一九五七）、広島県で猫の発症が最後となって、我が国での狂犬病は終焉を迎えた。

（6）捨子

幕府は貞享四年、捨子は捨てられた所が養育にあたり、養子に貰い子する際の届けは不必要とした⁽¹⁶⁾。この幕令は四月二八日に国元に届き、続いて届いた元禄三年一〇月の幕令は次のように伝えられた。

〔史料5〕「江戸日記」元禄三年一〇月二六日条

一、高木伊勢守様・藤堂伊勢守様分御用之儀有之間、伊勢守様御宅迄御聞役之内老人罷出候様にと昨夜中申参候付、相淵竹右衛門参上候処、捨子之儀ニ付而御書付忝通御渡被遊候、則左ニ記之、

覚

捨子いたし候事、弥御禁制ニ候、養育なりかたきわけ有之候ハ、奉公人ハ其主人、御領ハ代官手代、私領者其村之名主五人組、町方ハ其所之名主・五人組へ其品申出へし、はこくみなりかたきにおいてハ、其所にて養育可仕候、此上捨子仕候ハ、急度曲事たるべきもの也

午十月 日

この幕府大目付よりの捨子禁止令は江戸町触と同文であり、領内へ周知させた。享保一九年の幕令は、捨子を貰った後に他へ遣わすことの停止などで、捨子禁止が続いていることになり、黒石領へも伝えられた⁽¹⁷⁾。

弘前藩庁は捨子の取り扱いに不慣れたため、元禄五年、幕府に伺った上で、捨子を町預りにさせ、父母の搜索は不問にする方針を打ち出した⁽¹⁸⁾。「国日記」には元禄五年に初めて捨子の記載があり、生類憐みの令が廃止するまでの捨子は表（1）のようになる。宝永三・四年、以前から引き続き町預りになっている捨子の養子縁組が決まったが、これは数に加えていない。性別・年齢については記載が少ない。町年寄が把握した捨子の実数は、元禄一五年一一月に二人、同一六年六月に二五人、九月に二二人となっていて、表（1）の記載数とに差がある。「国日記」の事例は事件・養育費用請求に関わるものを記載しているので、町年寄りの実数と一致しない。元禄期に多くみられる捨子の記載は、周知により藩庁への届け出が減少していったものと考ええる。

元禄八年の飢饉の年は餓死者三万人であったが捨子は一人と少ない。同九年、病死二・投棄後の死亡一・犬に喰われての死亡一人を含め、一

表 (1) 「国日記」記載の捨子数

元号	西暦	捨子数	性別			年齢別								死亡
			男	女	不明	2	3	4	5	6	7	8	不明	
元禄5	1692	3	1	1	1				1	1			1	
元禄6	1693	6	1	2	3		1						5	1
元禄7	1694	0												
元禄8	1695	1		1									1	
元禄9	1696	15	2	5	8	2			2	2		1	8	15
元禄10	1697	3		2	1					1	1		1	
元禄11	1698	0												
元禄12	1699	2		1	1								2	
元禄13	1700	0												
元禄14	1701	0												
元禄15	1702	9	2	1	6		1	1		2			5	1
元禄16	1703	19	3	5	11	1	2	1	3	3			9	
宝永1	1704	6	1	2	3			1	1		2		2	
宝永2	1705	3	1		2	1		1					1	
宝永3	1706	3			3								3	
宝永4	1707	0												
宝永5	1708	9	1	4	4	1	2		1			1	4	1
宝永6	1709	1	1			1								
計		80	13	24	43	6	6	4	8	9	3	2	42	18

五人全員が死亡している。同一五年、町年寄から町内茂合銭で預かった町預りの倒人・捨子の賄銭の不足から、藩庁に一人一日一合五夕の下付願いが提出され、認められたようである。同一六年、町の有志者より藩庁に、一〇歳以下の子供が町中を流浪、川原で寝起きして犬に喰われる恐れがあることから、施行小屋の設置願いが出されたが、許可になったかは不明である^②。また、惣町名主より藩庁に捨子二人で難儀しているため、乞食頭に渡すか養育料一人扶持下付か、どちらか一方の採用願いが出された。町・勘定両奉行は協議の上で家老に伺い、養育料を五合に

改めることのみを認め、弘前藩では乞食は被差別の人を指すことから、捨子を乞食身分に落とすことは認めなかった^③。

在方での捨子は、「国日記」に生類憐みの令廃止まで一〇例あり、表(1)

に含めてある。その後に在方の捨子の記載が無いのは、郡奉行へ届け出る必要がなくなったためとみられる。

生類憐みの令の施行中で親元が判明した捨子五例を挙げる。

- ①元禄五年一〇月一四日、親方町の半十郎夫婦は、孫(男・五歳)を徒町橋下に捨子したことにより牢舎入りとなった。捨子は徒の者が見つけ、組頭が養育したが病死した。父が欠落し、母は藩医に奉公に出るため、祖父母に養育を頼んだ。ところが、生活苦から祖父は町人、祖母は藩士のところに奉公に出ることになり、養育の手立てがなく捨子したという。一月一〇日、弘前藩は藩主名で幕府老中大久保忠朝に取り扱いについて伺をたてた。返事は捨子禁止令を知っていたかどうかが問題となるので、幕府奉行衆に聞き合わせ、弘前藩の仕置きに準じて処分するように伝えてきた。貞享四年の捨子禁止令が『平山日記』に見えることから、領内に周知していたものとみられる^④。このことを踏まえ、同六年三月一〇日、会所において四役出座の上、目付より祖父母に追放が申し渡された。母は捨子をしたことを知らなかったことから処罰を免れている^⑤。
- ②元禄五年二月二六日、東桶屋町にまつ(女・六歳)が捨てられてあり、名主が又右衛門に預けたが、まつは両親・兄弟、隣家の人の名前は知らないという。祖父の名前は知らないが乞食であるという。町年寄・町目付・東桶屋町名主が、まつを連れて長勝寺辺の非人小屋・茂森新町・新寺町を探し、乞食頭にも尋ねたが祖父は見つけ出せなかった。三年後、子供の無い長勝寺門前の半兵衛は、新寺町預で一〇歳になったまつを養子に貰い受けた^⑥。

- ③元禄六年一月四日、東長町に弥郎が捨てられてあり、徒目付が中野村

の親助作を探し出し、庄屋を付き添わせて連行してきた。同二三日、郷足軽が口書を取り、助作は牢舎入りとなった。同二日、東長町の廻り預りとなっていた弥郎は、親類の中野村庄屋六左衛門預りとなった。同六年三月一二日、助作は追放の処分となった⁽¹⁷⁾。

④元禄六年一月一日、東長町の勘右衛門の屋敷前に捨子があつた。これを、勘右衛門の下人安右衛門・借屋四郎左衛門は徒町の川原に捨てた。勘右衛門は押込めとなり、安右衛門・四郎左衛門は牢舎入りとなった。

同三月一二日、勘右衛門は留守であつたことから罪を免ぜられ、安右衛門・四郎左衛門は養育せずに捨子したことから弘前追放となった⁽¹⁸⁾。

⑤元禄一〇年、徒橋下の捨子喜兵衛（九歳）が町預りになっていたが、親が徳田町家借の足軽工藤弥惣太であることが判明したものの、両親の死亡により祖父の町居村三左衛門に引き取られた⁽¹⁹⁾。

幕府は生類憐みの令廃止後、捨子をした側への刑罰で、寛保二年以後に当人は所払、家主・五人組は過料、名主は江戸払としたが⁽²⁰⁾、これは、従来の例を成文化したものと考ええる。また、養育費を得た後に捨子した場合は死罪・獄門・磔になっている⁽²¹⁾。岡山藩では牢舎・長屋入の外、貞享三年、夫の仕送りが無く貧困から当歳の子を池に沈めて殺した妻は、耳・鼻削ぎの上、村預けになっている。藩庁は乳持ち奉公すれば子を養うことができるのに、しなかったことを処分の理由にしている。夫は仕送りもせず、妻が子殺しをするのを聞きながら捨て置いたことにより、片耳削ぎの刑後に村預けになっている⁽²²⁾。津山藩では所払、小野藩では手鎖・村預け、加賀藩では梟首・斬罪・磔となっている⁽²³⁾。

弘前藩では生類憐みの令廃止後の嘉永二年六月一八日、新里村の惣右

衛門の子常は、和徳村長之の妻せんと密通し、秋田へ逃亡を企てたが捕縛されて入牢となった。長之の子の溺死については知らないことから、同年二月二三日、大赦により一〇里四方追放、大場御構となった。この大赦は九代藩主寧親の一七回忌を指すとみられる。相手のせんは、逃亡に二男万之が追いかけてくるので、着物に石を入れ原ヶ平村の溜池で溺死させた。大赦により、三〇〇日の牢居が終わった後で十里四方追放、大場御構となった⁽²⁴⁾。

弘前藩の場合、親が子を殺した場合、藩士で弘前追放、農民で村払となっていて、捨子の場合も所払が基本であつたとみられる⁽²⁵⁾。また、捨子を下人にする例はあつたが、乞食身分に落とす例はみられなかった。

捨子預りについては、元禄一五年、紺屋町名主より町奉行に対し、捨子（三歳）を五五・六日預り、幼少のために日毎に宿を変えることが無理なため、常宿三軒で交代預りしてきたが、町内の養育銭の不足から他町に預けてよいかの伺を出し、勝手次第との返答を得ている⁽²⁶⁾。翌一六年、藩士の屋敷前の捨子は、三奉行の協議により捨てられた場所の町内が引き取るようになった⁽²⁷⁾。元大工町の石右衛門夫婦から町預けになっている捨子の牛（七歳）を戻したいとの願いと、茂森町の宇右衛門より町預りの捨子（男）を末々下人にしたい旨の養子願いは認められている⁽²⁸⁾。

宝永五年、土手町名主に藩庁は町預りの三歳の捨子の扶持として一三二日分、五斗二升八合を支給している⁽²⁹⁾。同七年、捨子くに（一四歳）は、四歳から土手町預りとなっていて、下女にしてもよいことになったが引き受け手がなく、正徳元年、樋ノ口村藤左衛門が養女にすることに決まった⁽³⁰⁾。この間、一一年間にわたる町預りであつた。天保五年、禰宜町

の万右衛門から町奉行に子供不足から亀甲町預りの捨子（男）の養子願いが出て、惣町割合で養育銭七〇目を用意している。⁽¹⁴⁾

町内諸事茂合銭の不足補充は、宝永元年、家の売買で双方から一〇匁を徴収することが認められ、弘前惣名主が預かった。これが、享保七年には一六貫匁余に達して、捨子養育の外、賄・木戸繕い・弘前八幡宮祭礼の山笠・鉾等の経費に充てている。⁽¹⁵⁾

捨子の置かれた場所で屋号が確認できるものを表（2）にした。三国屋源蔵（NO 17、亀甲町）、玉田屋善兵衛（NO 37・39、紺屋町）は『文政年間津軽長者鑑』⁽¹⁶⁾で確認でき、高嶋屋（NO 10、土手町）は高嶋屋半左衛門・石見屋（NO 26・30、誓願寺前）は石見屋忠兵衛（新町）に比定できる。金木屋治三郎（NO 14）・三浦屋太助（NO 21）・大津屋九左衛門（NO 25）・菱屋武兵衛（NO 35）・紙屋佐太郎（NO 38）・太田屋文内（NO 40）は、「金木屋日記」⁽¹⁷⁾の天保八年（一八三七）に藩から上納金を割り当てられた商人の中にある。「町屋数圓」⁽¹⁸⁾で玉田屋嘉右衛門（NO 4、茂森町）は玉田屋喜右衛門、三国屋（NO 11、東長町）は三国屋六右衛門、菱屋（NO 33、土手町）は菱屋次郎兵衛に比定できる。『持丸長者鑑』⁽¹⁹⁾には大津屋九左衛門・高嶋屋半左衛門・玉田屋善兵衛・三国屋源蔵の名前がみえる。これらは皆大店とみられ、小見世に捨てたのが一七例あるが、へその緒・養育金・手紙を添えた例があったかは不明である。この内、養育に当たったのが七例、出生後で乳持ちを探したのが八例、出入りの者へ預けたのが二例ある。

このように、捨子は町内が一日毎に持ち廻りで預り、町内茂合金で養育し、子が無い家や成人後の労働力を期待されての養子縁組があること

表（2）「国日記」記載の捨子預り商家

NO	年号	西暦	月	閏	日	町名	預り商家名	場所	捨子	備考
1	元禄6	1693	1		18	東長町	佐渡屋惣兵衛			養育、20日衣類申付
2	文化6	1809	9		7	下土手町	池田屋	小見世		養育申付
3	文化12	1815	2		1	覚仙町	近江屋喜左衛門	通之内		喜左衛門貫受、町奉行承
4	文化13	1816	12		14	茂森町	玉田屋嘉右衛門	小見世		同町甚助養育願、町年寄添書、町奉行へ申出
5	文政4	1821	10		29	亀甲町	中野屋			町内預・養育、11月9日1人扶持・10目
6	文政5	1822	2		21	東長町	酒田屋久次郎			同家で貫乳、町奉行より養育申付
7	文政5	1822	3		23	桶屋町	元屋			同人養育、町奉行承
8	文政5	1822	4		1	東長町	酒田屋久次郎		昨今出生男子	貫乳、久次郎養育
9	文政6	1823	9		5	土手町	秋田屋			養育
10	文政6	1823	9		22	土手町	高嶋屋			松森町源治に預・養育
11	文政8	1825	2		21	東長町	三国屋			一番町の者に養育
12	文政8	1825	3		17	本町	近江屋庄八	近江屋場之内		庄八養育
13	文政9	1826	2		26	鍛冶町	中畑屋	小見世		町奉行より養育申付
14	文政9	1826	4		1	東長町	金木屋治三郎	懸屋敷場之内		治三郎より養育願
15	文政10	1827	8		2	土手町	三国屋	小路	女子	菱屋伝蔵に養育申付
16	文政11	1828	1		9	本町	近江屋庄六			庄六預・養育
17	文政11	1828	9		25	亀甲町	三国屋源蔵	三国屋場之内		同町菱屋市太郎預・養育
18	天保1	1830	12		18	紺屋町	糸屋富太郎	小見世		御蔵町長八預・養育、24日孫に願、町奉行聞届
19	天保2	1831	1		11	本町	近江屋喜左衛門	大戸之内	出生60日以内	同人出入の者預・養育
20	天保2	1831	2		15	本町三丁目	金木屋又三郎	出酒屋大戸之内	出生30日以内女子	同人出入の者に預・養育
21	天保2	1831	4		14	土手町	三浦屋太助	小見世	出生直後女子	太助に養育申付
22	天保2	1831	4		25	誓願寺前	石見屋		女子	乳持に養育
23	天保3	1832	7		17	東長町	金木屋			町内預・養育
24	天保4	1833	2		20	和徳町	伊勢屋		出生50日以内女子	北横町乳持に養育
25	天保4	1833	10		13	本町	大津屋九左衛門	小見世		九左衛門介抱、町奉行承
26	天保4	1833	11		3	誓願寺前	石見屋	小見世		町内預・養育
27	天保4	1833	12		18	東長町	三国屋伝三郎	小見世	3歳女子	大工町伊八に預・養育、町奉行承
28	天保5	1834	6		2	亀甲町	平田屋忠三郎	小見世	出生50日以内子	同町大工久次郎に預・養育、町奉行承
29	天保5	1834	8		27	新町	米屋	小見世		同町又吉より養育申出
30	天保7	1836	11		2	誓願寺前	石見屋			同町已之丞より貫受申出
31	天保8	1837	2		13	亀甲町	前田屋	小見世	女子	同町の者に預
32	天保8	1837	3		13	元寺町	奈良屋久左衛門	小見世		同町民治に養育申付
33	天保8	1837	8		22	土手町	菱屋	小見世		他町の者に養育
34	天保8	1837	9		2	本町	大坂屋三郎次	通之内捨子		乳持に預・養育申付
35	天保8	1837	12		24	土手町	菱屋武兵衛	小見世		新割町福松に養育、町奉行承
36	天保10	1839	8		12	土手町	境屋太左衛門	小見世	男子	同町富次に預、町奉行申出
37	弘化2	1845	6		25	紺屋町	玉田屋善兵衛	小見世		同町乳持に養育申付、町奉行申出
38	弘化2	1845	7		11	亀甲町	紙屋佐太郎	紙屋場之内	出生14・15日以内女子	町名主が貫乳、佐太郎に預、両組夜回り中に発見
39	嘉永3	1850	1		24	紺屋町	玉田屋善兵衛	小見世		乳持に養育申付、町奉行申出
40	嘉永4	1851	10		20	御蔵町	太田屋文内		出生20日以内男子	同町長八妻に預・養育、町奉行申出

が解った。捨てる側の多くは生活困窮者であり、大店に捨子する場合、捨子の養育を頼む親の気持ちが窺えるが、乳幼児の生存率は極めて低かったものとみられる。弘前藩領で捨子の養子斡旋者や、捨子の養育費を受取後の再度の捨子・殺害した例はみられなかった。藩庁には養育料支給の定めがなく、町方からの願いにより扶持米・古着を下付した。

生類憐みの令が廃止後の正徳二年、黒石領からの捨子ちよん（二一歳）を、今井源右衛門から土手町月行事太右衛門が預かったが、父は病死・黒石領に居るといふ母は行方不明で、藩庁より扶持米支給の扱いとなった。⁽¹⁴⁾

宝暦五年の飢饉の翌年、藩庁は捨子の発生がみられるところから、子は藩国家の国民であり、養育困難者の申し出でによりその所の頭が預かるという論旨を領内に配布した。⁽¹⁵⁾ 捨子発生の社会状況の解決なしに捨子が減少したとは考えられない。

飢饉資料の「耳目心通記」・「天明卯辰日記」⁽¹⁶⁾には、捨子がみえるものの「国日記」にはこれを裏付ける記載がない。「天明凶歳日記」・「凶作の様子書」⁽¹⁷⁾には飢饉の悲惨な様子はうかがえるが、捨子の具体例が見られず、その実態に迫ることができない。

「国日記」に記載された最後は、嘉永四年、御蔵町太田屋文内の扱った捨子を、同町長八の妻が預り養育した例である。⁽¹⁸⁾

捨子は生類憐みの令が廃止後も、捨てられた場所の町方・在方が養育にあたり、明治に入っても地域の相互扶助に引き継がれていた。⁽¹⁹⁾

『平山日記』の編者は、貞享四年四月一日の幕令を在々浦々まで厳しく触れられ、將軍綱吉の犬を好み労わるところから発せられたものと

認識していて、生類憐みの令は弘前領内に周知されていたことが解る。⁽²⁰⁾

おわりに

幕府と弘前藩江戸藩邸・国元間で生類憐みの令に抵触する恐れがある場合は、幕府に伺って案件を処理しており、処罰するときは幕令を知り得ていたかを基準にして、藩主以下が慎重に対応していることが明らかになった。幕令は江戸・国元において藩士から領民全体に広く周知が図られていた。江戸では生魚・鳥・うなぎ・どじょうの商売禁止、鶯鳥・家鴨・鶏以外の飼鳥が禁止されたが、弘前藩領でこれが実行されたかは不明である。

弘前藩の鉄砲改め、熊・狼荒れに対する鉄砲打の派遣、捨馬禁止・捨子禁止の政策は、生類憐みの令廃止後も継続していることが考察できた。

特に、藩庁は捨子の養育は幕令に示されたように町方・村方に任せ、直接関与せずに養育料を補助する方針をとり、生類憐みの令廃止後もこの政策は変わらなかった。藩士の屋敷前の捨子は、捨てられた場所の町が養育にあった。捨子した者への処罰は、所払が基本で、家主・五人組・名主は処分されなかったものとみられる。

生類憐みの令が施行された二四年間の殺生忌避は、その後の国民思想の形成に影響を及ぼし、現代に至っていると考ええる。

現在、狼は絶滅したが、平成二九年（二〇一七）、山菜採りの人が熊に襲われる被害が続出し、死傷者は秋田県二〇・岩手県一七・青森県九人を数え、人と熊との共生が将来にわたり懸念される状況にある。⁽²¹⁾

また、明治五年、横浜・大阪では邏卒が犬を抑え、翌年、東京では畜犬規制により邏卒が打ち殺しても良いことになり、この動きが、各県にも拡大していった。⁽¹⁵⁾ 同六年七月、青森に邏卒が置かれると、青森町でも捨犬を安方の蔵に入れて撲殺し、町内外の犬狩を行った。⁽¹⁶⁾ 同九年、神奈川県は犬税として一匹五〇銭と鑑札を付けることを義務化すると、飼主のいる犬が残り、徘徊する町犬・村犬が姿を消していった。今は犬・猫の殺処分が社会の問題になっている。

平成一九年、「ここのとりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)を設置した慈恵病院(熊本市)は、同二八年三月までに一二五人を預かり、理由は生活困難三二・未婚二七・不倫一六件で、障害のある子は一人を数える。⁽¹⁷⁾ 捨子はジェンダーの抱える問題であり、社会全体で課題解決にあたる必要に迫られているといえよう。

残された生類憐みの令に関する課題は次の三点である。①正徳四年(一七一四)から享保三年(一七一八)まで弘前藩上屋敷西門に置かれた捨子を屋敷内で養育しているところから、⁽¹⁸⁾ 江戸での生類憐みの令廃止後の捨子の取り扱い。②寺社領の門前での実態。③先行研究で取り上げられた藩以外の諸藩の江戸・国元における対応。

註

- (1) 塚本学『生類をめぐる政治』平凡社ライブラリー 一九九三。
- (2) 山室恭子『黄門さまと犬公方』文春新書 一九九八。
- (3) 根崎光男『生類憐みの世界』同成社 二〇〇六。『犬と鷹の江戸時代——犬公方綱吉と鷹將軍吉宗』吉川弘文館 二〇一六。

- (4) 徳田彦安「日本における捨子の研究」(『三田史学』第七卷第四号 一九二八) 五七頁。『同』第八卷第一号 一九二九) 四二頁。

- (5) 井伊玄太郎「近世における捨子の実態」(『桜美林論集』第二号 一九七四) 三三～四三頁。

- (6) 有賀喜左衛門『有賀喜左衛門著作集』Ⅷ(未来社 一九六九) 三〇五～三六一頁。

- (7) 中野達哉「江戸の大名屋敷と捨子」(江戸東京近郊地域史研究会編『地域史・江戸東京』岩田書店 二〇〇八) 一三三～一六〇頁。

- (8) 守屋茂『岡山県下に於ける慈善救済史の研究』(岡山県社会事業史刊行会 一九五八) 五五六～五六七頁。

- (9) 妻鹿淳子『犯科帳のなかの女性たち——岡山藩の記録から』(平凡社選書 一九九五) 二二二～二五五頁。

- (10) 沢山美果子氏は、捨子に関する論文を数多く発表されているので、ここでは『江戸の捨て子たち——その肖像』吉川弘文館 二〇〇八)と『江戸の乳と子ども——いのちをつなぐ』(吉川弘文館 二〇一七)に載せられている論文は省略した。「近世後期捨子の実態——岡山城下町を中心に」(『順正短期大学(現吉備国際大学短期大学)研究紀要』二八号 一九九九) 二七～五一頁。「天保飢饉下の捨子——津山藩領内における」(『同』三〇号 二〇〇一) 二二三～四四頁。「近世後期の出生をめぐる諸問題——墮胎・間引きから捨子まで」(『同』三二号 二〇〇三) 二九～四五頁。「捨て子はどこに捨てられたか?——一九世紀前半における西日本の捨て子」(『同』三六号 二〇〇七) 一～一六頁。「一関藩の育子仕法からみた武士層の妊娠・出産」(岡山大学大学院社会文化科学研究所『文化共生学研究』第九号 二〇一〇) 五九～八二頁。

- (11) 安川巖氏「宗旨御改帳に見る捨子の記録」(『西日本文化』第七五号 一九七二) 一〇～一四頁。

- (12) 田中道雄「捨子と蕉門俳諧―国老・藩儒・町人を結んだ人情」(『福岡県史』近世研究編(3) 福岡藩3 一九八七) 六三六～六五〇頁。
- (13) 横田武子「福岡藩における産子養育制度」(『福岡県地域史研究』第一四号 一九九六) 一〇九～一三九頁。「福岡藩における産子養育制度の変遷」(『同』第一五号 一九九七) 七七～八八頁。
- (14) 井上隆明「近世後期福岡藩の捨子―町方を中心に」(『福岡大学大学院紀要』第三四巻第一号 二〇〇二) 九七～一一七頁。
- (15) 三木えり子「近世後期小野藩における捨子と地域社会」(『歴史と神戸』四一卷三号 二〇〇二) 二一～一六頁。
- (16) 川本英紀氏「捨子の置手紙と氏・筋・由緒―近世後期小倉藩領を事例として」(『部落解放史ふくおか』第一一六号 二〇〇四) 三四～五八頁。
- (17) 立浪澄子「加賀藩の捨子」(『富山女子短期大学紀要』第二七輯 一九九二) 一三四～一四八頁。
- (18) 菅原憲二「近世京都の町と捨子」(『歴史評論』四四二号 一九八五) 三四～六〇頁。
- (19) 小堀一正『近世大坂と知識人社会』(清文堂 一九九六) 二〇四～二四九頁。
- (20) 海原亮「都市大坂の捨子養育法―『年々調用留』の事例から」(『住友史料館報』第四〇号 二〇〇九) 八九～一五〇頁。
- (21) 菊池勇夫「近世飢饉下の捨子・子殺し―東北地方を事例に」(宮城学院女子大学キリスト教文化研究所編『キリスト教研究所年報』第三四号 二〇〇〇) 六三～一〇一頁。
- (22) 伊藤好一『江戸の町かど』(平凡社 一九八七) 一六六～二二〇頁。
- (23) 岩淵令治「江戸武家方辻番の制度的検討」(『史学雑誌』第一〇二編第三号 一九九三) 八〇～一〇六頁(『江戸武家地の研究』(塙書房 二〇〇四) 一八九～二三三頁に再収)。

- (24) 前掲註(1) 一一八～一二一・一五六頁。
- (25) 拙稿「弘前藩における旅人の死の取り扱いについて」(『年報市史ひろさき』第一〇号、弘前市企画部企画課、二〇〇二) 八六～一二二頁。「日本における旅人の保護について」(東北女子大学・東北女子短期大学紀要第五一号、二〇一二) 一二～二八頁。
- (26) 弘前市立弘前図書館津軽家文書。
- (27) 『江戸町触集成』第二二巻(塙書房 一九九四) 資料番号二五六六・二五六七、一五九・一六〇頁。『正宝事録』第一巻(日本学術振興会 一九六四) 資料番号七一九・七二〇、二五五・二五六頁。「国日記」貞享四年(一六八七) 四月二八日条。
- (28) 「江戸日記」貞享四年九月五日条。高橋元貴氏は、幕府目付が辻番の持場(廻り場)を通して道空間の治安維持に当たったことを明らかにしている(『江戸町人地の空間史―都市の存続と維持』(東京大学出版会 二〇一八) 一三三～一七八頁)。
- (29) 「江戸日記」元禄七年五月二八日条。「国日記」同年閏五月一日条。
- (30) 「江戸日記」元禄八年八月一一・一二・一七日条。
- (31) 「江戸日記」元禄一三年一月二四・二六・二八・二九日、二月四・九日条。
- (32) 「江戸日記」元禄一五年一月二〇日条。絵師新井寒竹は、寛文二年、弘前藩邸前に捨てられてあったのを辻番が見つけ、藩邸で養育されたが、生類憐みの令以前に付き、ここでは取り上げなかった。
- (33) 「元禄宝永珍話」(『近世風俗見聞集』第一(国書刊行会 一九二二) 一八二・一八三頁)。
- (34) 「江戸日記」元禄一〇年九月二二日、二七日、一〇月一四日条。
- (35) 「江戸日記」貞享四年六月九・二一日条。
- (36) 「江戸日記」元禄一二年九月二六日条。

- (37) 鈴木政四郎「津輕藩に於ける生類憐れみの令とその始末」(『うとう』八七号 一九八一) 三一頁。岩崎繁芳「津輕における生類憐れみの令の展開―石田坂村百姓違反事件を探索」(『北奥文化』第一五号 一九九四) 一六六―一八四頁。(『同』一六号 一九九五) 一一二―一二八頁。
- (38) 石井良助編近世法制史料叢書1『御仕置裁許帳』(創文社 一九五九) 二九四頁。「国日記」元禄四年九月四日によると、相州竹右衛門は相淵竹右衛門の誤りである。「津輕徧覧日記」「平山日記」「永禄日記」は、八丈島遠島としているが新島の誤りである。
- (39) 「国日記」宝永七年一月一六日条。
- (40) 「江戸日記」元禄八年二月二三・二六日条。
- (41) 「江戸日記」元禄九年九月八日条。「国日記」同一〇月八日条。
- (42) 『江戸町触集成』第二卷(塙書房 一九九四) 資料番号三三三四、三七・三三八頁。
- (43) 前掲註(42) 資料番号三三三〇、三三五頁。
- (44) 前掲註(42) 資料番号三四一四・三四一五、三六九頁。
- (45) 『正宝事録』第一卷(日本學術振興会 一九六四) 資料番号八五八、三三四頁。資料番号一〇一四、三六一頁。
- (46) 前掲註(1) 二二三・二二四・二三三頁。
- (47) 田中達哉『江戸の武家社会と百姓・町人』(岩田書店 二〇一四) 五七―六四頁。
- (48) 塚本学校校注『当代記―將軍綱吉の時代』(東洋文庫 平凡社 一九九八) 一三五―一三九頁。山室恭子『黄門さまと犬公方』(文春新書 一九九八) 一七一―一七六頁。
- (49) 「国日記」文化一四年七月八日条。
- (50) 東北芸術工科大学東北文化研究センター編『弘前藩庁御国日記狩獵関係史料集』(全三卷) 二〇一一。

- (51) 門脇朋裕「弘前藩における生類憐れみの令の一端―領内への伝達と処罰例を中心に」(『弘前大学国史研究』第二三四号 二〇一三) 一四―二五頁。
- (52) 前掲註(1) 四七頁。
- (53) 「国日記」寛文四年五月二九日条。
- (54) 「国日記」天和三年閏五月二日・一日条。
- (55) 「国日記」貞享二年一月二四日・二月二日条。
- (56) 「国日記」元禄元年一月一九日、同二年閏一月二〇日条。
- (57) 「国日記」元禄二年二月二八日、三月九日、九月三〇日、同三年三月七日条。
- (58) 「国日記」元禄一四年一月二五日条。
- (59) 「国日記」元禄一三年二月八日、正徳二年五月七日条。みちのく双書第六〇集『原子家文書』下(青森県文化財保護協会 二〇一七) 七二・七三頁。
- (60) 「国日記」元禄一〇年四月二八日条。
- (61) 「国日記」元禄一五年一〇月四日、文化一二年四月二日条。前掲註(50) 第二卷解説四―七頁。
- (62) 「国日記」元禄一五年二月二日、享保二年三月一日条。
- (63) 「国日記」嘉永五年五月七日、同一〇月二二日条。
- (64) 前掲註(50) 第二卷解説三五―三九頁、卷末資料「熊による人身被害」三四九―三五二頁。
- (65) 「江戸日記」元禄二年六月二八日。「国日記」元禄二年七月一三日条。
- (66) 「江戸日記」元禄八年八月二四日。「国日記」元禄八年九月一日条。
- (67) 「国日記」元禄九年四月四・一六日、五月二日・一五日条。
- (68) 「国日記」元禄一一年三月二・二四・二五日条。
- (69) 「国日記」正徳三年七月六日条。
- (70) 前掲註(50) 第二卷解説三一―三五頁。卷末資料「狼による人身被害」

一覽表」三四三～三四八頁。

- (71) 「国日記」 元禄五年二月二八日・二九日条。
- (72) 「国日記」 元禄一〇年四月二七日条。
- (73) 「国日記」 宝永元年八月一日条。
- (74) 「国日記」 宝永元年八月二三日条。
- (75) 「国日記」 宝永元年七月九日、九月八日条。
- (76) 「国日記」 元禄二年七月一三日条。
- (77) 「国日記」 元禄四年一〇月二八日条。
- (78) 「国日記」 元禄四年二月一〇日条。
- (79) 前掲註(25)「弘前藩における旅人の死の取り扱いについて」(『年報市史ひろさき』第一〇号、弘前市企画部企画課、二〇〇一)一一・一五・一一八頁。
- (80) 「国日記」 正徳五年四月二九日条。
- (81) 「国日記」 享保八年二月七日条。
- (82) 「国日記」 享保一四年三月一二日条。
- (83) 「国日記」 貞享四年二月一日条。
- (84) 「国日記」 貞享四年二月二日、同五年一月一六日条。
- (85) みちのく双書特輯『津軽史』第四卷(青森県文化財保護協会 一九七四)二四六頁。
- (86) 『御用格』寛政本下巻(弘前市教育委員会 一九九二)一二〇四頁。
- (87) 前掲註(1)二四〇・二八一頁。
- (88) 『青森県史』第四卷(青森県 一九二六)一七一～一七三頁。『新編八戸市史』近世資料編1(八戸市 二〇〇七)資料番号六一四八、三五六～三五八頁。
- (89) 「国日記」 元禄九年九月二〇日条。
- (90) 「国日記」 元禄一六年八月二二日(『新青森市史』資料編5(近世3)

青森市 二〇〇六、資料番号三三七、三五七頁。

- (91) 高照神社蔵(『新編弘前市史』資料編3 近世編2(弘前市企画部企画課 二〇〇〇)資料番号三九〇・三九二、一〇一〇～一〇一四頁)。
- (92) 「国日記」 宝永元年九月一三日条。
- (93) 福田友之『青森県の貝塚―骨角器と動物食料』(北方新社 二〇一二)。
- (94) 丹羽百合子「古代日本犬の実像を求めるために―縄文・弥生時代の出土例集成と派生した諸問題の確認」(『牙』二号 和歌山県勝浦町 一九八六)七～一四頁。山田仁史『いかもの喰い』(亜紀書房 二〇一七)三四～七八頁。
- (95) 前掲註(93)八五頁。
- (96) 金坂清則訳注『完訳日本奥地紀行』2(東洋文庫 二〇二二)二三七頁。『同』3、一八六・一八七頁、注(25)二九〇・二九二頁。
- (97) 長谷川成一『近世国家と東北大名』(吉川弘文館 一九九八)二二・三〇頁。
- (98) 「国日記」 天和二年一〇月二七日条。
- (99) 「国日記」 天和三年一月三〇日、三月二七日条。
- (100) 仁科邦男『伊勢屋稲荷に犬の糞』(草思社 二〇一六)一三五～一四二頁。
- (101) 「国日記」 貞享四年四月二八日条。『江戸町触集成』第二卷(塙書房 一九九四)資料番号二五六六、一五九・一六〇四頁。
- (102) 前掲註(92)。
- (103) 「国日記」 元禄六年二月一日、同二年一月二七日条。
- (104) 「国日記」 享保一四年七月二一日、元文五年六月二六日条。
- (105) 「国日記」 享保八年四月一〇日、一二月七日条。
- (106) 「国日記」 元禄二年六月一日条。
- (107) 「国日記」 元禄六年十一月三日条。

- (108) 「国日記」元禄八年一月一日条。
- (109) 「国日記」元禄九年九月八日条。
- (110) 「国日記」元禄十三年二月二日条。
- (111) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫「津軽偏覧日記」〈畑山信一編『解説 本津軽偏覧日記』一〇（私家本 二〇〇七）九三・九四頁〉。「天明凶歳日記」〔『新編青森県叢書』三（歴史図書社 一九七三）二九五・二九六頁。〕
- (112) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫「金木屋日記」〔『青森県史』資料編近世3（青森県 二〇〇六）資料番号四八七、六五二頁〕。『同』通史編2 近世（青森県 二〇一八）五二一頁。
- (113) 「国日記」元禄八年五月一日、同九年一〇月九日条。
- (114) 「国日記」享保一二年閏一月三・七日条。
- (115) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫「津軽偏覧日記」〈畑山信一編『解説 本津軽偏覧日記』六（私家本 二〇〇七）五一頁〉。みちのく双書第一集『永禄日記』（青森県文化財保護協会 一九五六）一六八頁。
- (116) 「国日記」安政二年二月二四日条。
- (117) みちのく双書第三五集『永宝日記』（青森県文化財保護協会 一八六二）二三九頁。
- (118) 『江戸町触集成』第二卷（塙書房 一九九四）資料番号二五六六、一五九・一六〇頁。
- (119) 『江戸町触集成』第四卷（塙書房 一九九四）資料番号六三三〇、四八二頁。「国日記」享保一九年一月一五日条。
- (120) 「国日記」元禄五年二月二九日条。
- (121) 「国日記」元禄一五年一月一六日、同六年六月二四日、九月一〇日条。
- (122) 「国日記」元禄一六年七月一〇日条。
- (123) 「国日記」元禄一六年九月一〇日条〔『青森県史』通史編2 近世（青森県 二〇一八）一三九頁〕。

- (124) 前掲註(51) 一五〇二頁。
- (125) 「国日記」元禄五年一〇月一四日、同六年三月一〇日、「江戸日記」元禄五年二月一〇日条。
- (126) 「国日記」元禄五年二月二七日、同六年一月二一日、同八年七月四日条。
- (127) 「国日記」元禄六年一月一三・一四・二二日条。
- (128) 「国日記」元禄六年一月三日、三月二二日条。
- (129) 「国日記」元禄一〇年六月一八日条。
- (130) 石井良助編『徳川禁令考』後集第二（創文社 一九六〇）四八七〜四八九頁。
- (131) 石井良助編『御仕置裁許帳』（創文社 一九五九）七六〜八二頁。
- (132) 前掲書（8）五六六・五六七頁。沢山美果子『江戸の乳と子どもーいのちをつなぐ』（吉川弘文館 二〇一七）一一四・一一五頁。
- (133) 前掲書（8）五六七頁。同（15）七〜九頁。同（17）一四一〜一四五頁。
- (134) 「国日記」嘉永二年二月二三日、同三年一〇月二六日条〔『新編弘前市史』通史編3 近世2（弘前市企画課企画部 二〇〇三）四九頁〕。
- 御場御構は、大場の四浦（青森・十三・鯉ヶ沢・深浦）・五浦（今別・蟹田・大間越・碓ヶ関・野内）・木作・飯詰・板屋野木・浅虫・黒石への立入禁止をいう〔黒瀧十二郎『日本近世の法と民衆』（高科書店 一九九四）七五頁〕。
- (135) 黒瀧十二郎『日本近世の法と民衆』（高科書店 一九九四）八四・八五頁。
- (136) 「国日記」元禄一五年一〇月一日条。
- (137) 「国日記」元禄一六年六月一日条。
- (138) 「国日記」元禄一六年二月一五日・七月四日条。
- (139) 「国日記」宝永五年八月二七日条。

- (140) 「国日記」 宝永七年閏八月二二日、正徳元年六月二二日条。
- (141) 「国日記」 天保五年八月二二日条。
- (142) 「松井四郎留書」の「町中家売買徒銭相改覚」〈『新編弘前市史』資料編2 近世編1(弘前市市長公室企画課 一九九六)資料番号一一五〇、一〇八〇頁〉。
- (143) 弘前市立弘前図書館一般郷土資料。
- (144) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫「金木屋日記」〈『青森県史』資料編近世3(青森県 二〇〇六)資料番号四八七、六五四・六五五頁〉。
- (145) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫〈『新編弘前市史』資料編2 近世編1(弘前市市長公室企画課 一九九六)資料番号一一五七、一一三六・一一七一頁〉。
- (146) 弘前市立弘前図書館一般郷土資料。
- (147) 「国日記」 正徳二年一〇月二二日条。
- (148) 「国日記」 宝暦五年一〇月一日、二月九日、同六年一月二〇日条。
- (149) 『日本庶民生活史料集成』第七卷(三一書房 一九七〇)二九〇～二九五頁。
- (150) 豊島勝蔵編『津軽の飢饉史』(森田村古文書研究会 一九八〇)一〇〇頁。
- (151) 『新編青森県叢書』三(歴史図書社 一九七三)二九五・二九六頁。
- (152) 『五所川原市史』資料編二・上巻(五所川原市 一九九五)資料番号三四一、九二四頁。
- (153) 「国日記」 嘉永四年一〇月二〇日条。
- (154) 松山郁夫「明治期の窮民救済法案に含まれる福祉の考え方」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第一六集第一号 二〇一一)二一九～二二〇頁。
- (155) みちのく双書第二二集(復刊・みちのく叢書第一七巻『平山日記』(青

- 森県文化財保護協会 一九六七)七二・七三頁。平山家は代々湊村庄屋であり、『平山日記』は六代半左衛門が編者とみられている。前掲註(51)一五・一六頁。
- (156) 『朝日新聞』平成三〇年四月一四日。『陸奥新報』同八月四日。
- (157) 仁科邦男『犬たちの明治維新―ボチの誕生』(草思社 二〇一四)一八六～一九一・二〇四～二〇八頁。『伊勢屋稲荷に犬の糞―江戸の町は犬だらけ』(草思社 二〇一六)二三五～二三八頁。
- (158) 弘前市立弘前図書館石見文庫「広船日記」。荒井清明『続々弘前今昔』(北方新社 一九八九)二七頁。
- (159) 仁科邦男『犬たちの明治維新―ボチの誕生』(草思社 二〇一四)一九一頁。
- (160) 沢山美果子『江戸の乳と子ども―いのちをつなぐ』(吉川弘文館 二〇一七)六九～七三頁。『朝日新聞』平成二九年五月七日。
- (161) 「江戸日記」 正徳四年七月一八日、享保三年二月一三日条。
- (しのむら・まさお 弘前大学国史研究会名誉会員)